

要 旨

音読は多くの授業で取り入れられてはいるが、現状では声を出して読んでいるだけの活動で、外国語科の目標であるコミュニケーションへの積極的な態度と自分の考えを相手に伝えるコミュニケーション能力の育成が図られているとは言い難い。そこで、本研究では音読を自己表現活動につなげていき、聞き手を意識したコミュニケーションができるように工夫を行った。そうすることによって、生徒の情報や自分の考えなどを英語で伝えようとする態度や能力の向上が見られるようになってきた。

〈キーワード〉 ①音読活動 ②自己表現活動 ③聞き手を意識したコミュニケーション

1 研究の目標

情報や自分の考えなどを英語で伝える能力及び伝えようとする態度を育成するために、音読活動を自己表現につなげる指導方法を探る。

2 目標設定の趣旨

平成 21 年 3 月に告示された高等学校学習指導要領では、現行の外国語科の科目が変更され、「コミュニケーション英語基礎」、「コミュニケーション英語Ⅰ」、「コミュニケーション英語Ⅱ」等が新たに設けられた。新設科目の名前が示すとおり、英語によるコミュニケーションに重点が置かれており、外国語科の目標として「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」<sup>1)</sup> ことが掲げられている。生徒に求められる「コミュニケーション能力」とは、英語を通して相手の意向などを理解し、自分の考えなどを表現できる能力であり、相手を想定したものでなければならない。そのため、情報や考えなどを相手に伝える必然性があるコミュニケーションの場を授業で設定する必要がある。

しかしながら、現状では英語でのコミュニケーション活動を中心とした授業が十分に実施されているとは言い難い。文部科学省が行った平成 18 年 2 月の英語教育改善実施状況調査(高等学校)によれば、「英語Ⅰ」の授業の大半または半分以上を英語で行っている高等学校は 11.2%(調査対象学校数 3750 校)しかなく、ほぼ 90%の高等学校では授業中の英語使用状況は半分または半分以下という状況である。これでは文法訳読中心の指導や教員の一方的な授業になり、授業を実際のコミュニケーションの場にすることはできず、生徒の英語によるコミュニケーション能力を育成することは困難である。また、「英語での授業をすでに始めた学校で、生徒に能動的に発言する機会をあまり与えない授業が見られる」<sup>2)</sup> という指摘があるように、一見すると英語で指示が出され、教科書の音読やペア活動を取り入れた授業であっても、英文を丸暗記し、ペアで会話を繰り返したり、相手が言う日本語を聞いて該当部分を英語に直したりという機械的な作業に終始するという授業が見られる。相手とコミュニケーションを図る場面がほとんどないために、自分の考えなどを伝えようとする態度の育成にはつながりにくいと考えられる。

そこで、本研究ではグループの研究テーマ、研究課題を受け、英語で情報や自分の考えなど伝えようとする態度及び能力を育成するために、音読活動を自己表現につなげる指導方法を探る。まず、教科書の音読活動への動機付けを ICT 機器やペア活動、グループ活動を用いて行う。そして、単元で扱われている場面や表現などを取り入れた自己表現活動を行う。聞き手を意識したコミュニケーションの場面で、相手に理解してもらうことを目的とした自己表現を行うことで、相手に伝えたいという

気持ちが高まり、自分の考えなどを英語で伝える能力及び伝えようという態度が育成できるだろうと考える。

### 3 研究の仮説

授業の音読活動において、聞き手を意識したコミュニケーションの場面を設定し、自己表現を促す工夫をすれば、情報や自分の考えなどを英語で伝える能力及び伝えようとする態度を育成することができるであろう。

### 4 研究方法

- (1) 音読活動を自己表現につなげる理論研究や先行研究の調査
- (2) 意識調査及び課題英作文の考察・分析による仮説の検証
- (3) 検証授業を行い、自己表現につながる音読指導の検証及び考察

### 5 研究内容

- (1) 音読活動を自己表現につなげる指導方法に関して、先行研究や文献等を基に情報収集及び理論研究を行う。
- (2) コミュニケーション能力や態度に関する意識調査及び課題英作文を実施し、その結果を考察及び分析する。
- (3) 所属校の1年生における単元「Information Everywhere」(3時間)、「Sadako's Story」(2時間)、「Revive the Mammoth」(3時間)で検証授業を行い、仮説の有効性を検証し、考察する。

### 6 研究の実際

- (1) 文献等による理論研究

音読は、どこの学校でも行うことのできる英語学習方法の1つである。これまで英語学習における音読に関する多くの研究が行われ、様々な結果や成果が報告されている。Miyasako はデータ検証により音読が全般的な英語能力と相関があり、英語力を向上させる効果的な練習方法の1つであることを実証している。そして、門田は音読の効果として、文字を見て瞬時に意味が分かる「単語認知の自動化」と、学習した単語、熟語や構文、英文、内容を取り込む「学習事項の内在化」の2つを示している。

このように、音読は英語力の向上に有効な学習方法であり、実際に多くの授業で取り入れられている。しかし、鈴木は、音読活動が孤立したり、最終的な目的になったりしている授業が多く、それがアウトプット活動につながっていないことを指摘している。このことについて門田は、「インプットだけでは学習システムは十分には作動せず、それをサポートするアウトプット活動をプラスして、初めて言語の形式面の獲得が生じる」<sup>3)</sup>と論じており、音読といったインプット活動を自己表現活動等のアウトプット活動につなげていくことが重要であることが分かる。また、次重は、コミュニケーションにおいては単語や文法だけでなく、状況や対人関係、場面や話題にふさわしい話し方で自分の考えを伝え、相手の発話をできるだけ相手の意図・意向に沿って理解することが必要だと述べている。つまり、円滑なコミュニケーションをするためには、聞き手を意識して意思疎通を図ることが重要になる。

以上のことから、本研究では、音読を自己表現活動につなげ、聞き手を意識したコミュニケーションができるように工夫を行うことで、情報や自分の考えなどを英語で伝える能力及び伝えようとする態度の育成を図りたい。

(2) 研究の全体構想

音読活動を自己表現につなげる工夫として、右表のように①音読活動Ⅰ，②内容理解，③音読活動Ⅱ，④音読活動Ⅲ，⑤自己表現活動という授業の流れにする。通常は、内容理解をした後に音読活動を行うが、発音できない語は読むことができないと考え、②内容理解の前に①音読活動Ⅰを行うようにした(表1)。⑤自己表現活動において問題となるのは、生徒が自分の考えなどを書いたり、話したりといった意見構築の自由度が高いと、英語で何をどう表現していいかわからず、

あまり意欲的に取り組むことができなくなることである。したがって、音読を通して重要な語句や表現を定着させ、それを利用して自己表現活動でアウトプットをさせるようにする。このように確実な定着を図るために段階的な音読指導を取り入れて、学習を進めていくことにした。また、検証の視点は次の3点とした。

- ア 【検証の視点Ⅰ】 音読による重要語句や表現の定着
- イ 【検証の視点Ⅱ】 聞き手を意識したコミュニケーションの定着
- ウ 【検証の視点Ⅲ】 伝えようとする意欲と伝える力の高まり

(3) 実践化への手立て

ア 音読の工夫

音読を段階的にすることで、自己表現活動に必要な音声面の基礎や定型語句、定型表現を定着させれば、生徒が自信をもって自己表現活動に臨めるのではないかと考えた。そこで音読活動をⅠ，Ⅱ，Ⅲの3段階に分ける(表2)。始めに、音読活動Ⅰでは発音やイントネーション等の音声面やチャンキングを習得させる。次に、音読活動Ⅱではペア活動を基本として、重要な語句や表現を身に付けさせる。最後に、音読活動Ⅲでは仕上げとして、音読活動Ⅰ，Ⅱで学んだことをしっかり定着させる。

表2 段階的な音読指導の内容

		活動の目的
音読活動Ⅰ	Model Reading(モデル音読)	・教師の音読を聞きながら、チャンクごとにスラッシュを入れさせる。
	Chorus Reading(一斉音読)	・単語の正確な読みを習得させる。 ・チャンクや音の強弱、イントネーションを意識させながら音読させる。
	Pair Reading(ペア音読)	・相手が詰まった場合、始めの部分のヒントを与える。 ・聞き手を意識した音読をさせる。
音読活動Ⅱ	Cloze Reading(穴埋め音読)	・聞き手を意識した音読をさせる ・自己表現活動で使用する表現等を身に付けさせる。
	合いの手音読	・音読指導Ⅰで学んだチャンキングや抑揚をつけた読み方を意識させる。 ・内容理解の確認と聞き手を意識したコミュニケーションをさせる。
音読活動Ⅲ	Buzz Reading(個人の音読)	・個人で何回も音読することで重要な語句や表現を定着させる。

イ 自己表現の工夫

事前に実施した意識調査の結果から、英語で話すよりも書く方が得意だと感じる生徒が多いことが分かった(表3)。自己表現活動を行う場合、自分の考え等をいきなり話すのはとても難しく、間違いを恥ずかしがる生徒が多い。よって、最初に文字にす

表3 英語で書く、話すに関する意識調査

	そう思う	少し思う	あまり思わない	思わない
英語で書くのが得意	1名	16名	7名	0名
英語で話すのが得意	2名	9名	13名	0名

ることで、自分の考え等を整理させて話すようにした。このようにすることで、間違いがあれば訂正し、自信をもって英語を話すことができると考えた。

また、教科書の本文を十分に音読させ、身に付けた表現を用いて自己表現をさせる。そして、自分の考えを相手に伝える、または、相手の考えを知る喜びを体験することで、生徒が音読の効果を実感できるだろうと考えた。

ウ 聞き手を意識したコミュニケーションの工夫

円滑なコミュニケーションを図るためには、聞き手を意識したものでなければならない。そのために、ペアやグループでの活動を主体とし、話し手は聞き手の反応を、また、聞き手は話し手の反応を確かめながら、あいづち、聞き返し、繰り返す、言い換え、ジェスチャー、アイコンタクト等を使う必要がある。そういったものを自己表現活動の中だけではなく、内容理解や音読活動でも行っていくことで、より聞き手を意識したコミュニケーション活動ができるのではないだろうかと考えた(図1)。

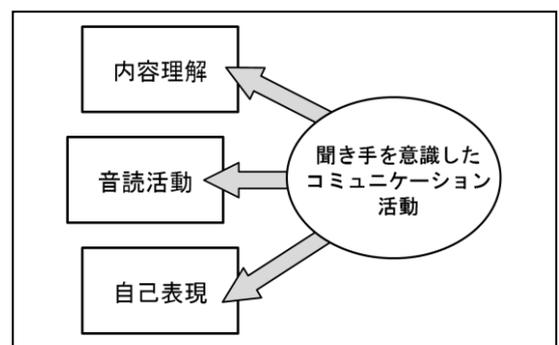


図1 聞き手を意識したコミュニケーション活動の導入

(4) 授業の実際

教科書は高等学校第1学年英語 I Voyager English Course I NEW EDITION を使用した。検証授業①では Lesson 4 「Information Everywhere」(3時間)、検証授業②では Lesson 5 「Sadako's Story」(2時間)と Lesson 8 「Revive the Mammoth」(3時間)を取り扱った。それぞれの単元において、音読活動を十分に行い、音読への意欲を高めつつ、身に付けさせたい語句や表現の定着を図り、それらを使用して自己表現させることを目標とした。

ア 音読活動 I

最初に、教科書の本文を印刷したプリントを配布し、チャンク(意味のまとまり)ごとにスラッシュを引かせた(図2)。次に、教師がチャンクごとに区切られた英文を読み、生徒には聞き取らせながら正しい場所にスラッシュを加えさせた。自分の引いたスラッシュと教師の音読により引いたスラッシュを比較し、正しいチャンキング(意味のまとまりで区切る)ができているかどうか確認させた。教師は、意味のまとまりで話すことが重要であると意識させることで、自己表現活動におけるスピーキング力の育成につながる基礎練習になることを強調した。また、モデル音読や一斉音読のときに、教師ができるだけイントネーションやアクセントを付けた読みをすることで、生徒に音声面での気付きを促すようにした。ペア音読のときには、相手が聞き取れるように、強調して読むところを意識して練習させた。

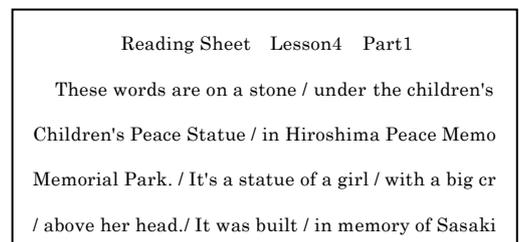


図2 音読プリント

## イ 内容理解

内容理解はプリントを使用し、つながりを表す語句やパラフーズの理解、空所補充による要約を中心にして、詳細よりも大意をつかませるように指導を行った(図3)。また、グループでのQ&A活動を行わせた。生徒は内容に関する質問を考え、グループ内でお互いに問答をした。相手の答えが間違っていた場合、それを訂正し、正しい答えとその理由を述べるようにさせた。本文の内容に関する質問を作ることで内容理解を深めるだけでなく、相手の応答を聞いて、それに対応する行動をとる必要がある。このことによって、聞き手を意識したコミュニケーションを心掛けることができるようになる考えた。

## ウ 音読活動II

主に、ペアでの音読を通して、音読活動Iで練習したチャンキングや発音等、及び、内容理解で学習した語句や表現を定着させることを目指した。本文のキーワード等を空欄にしたプリントを使ってクローズリーディング(空欄に語句を補充しながらの音読)を行った(図4)。ペアが同じものを音読しないように2種類のプリントを用意した。生徒はペアをつくり、1人が空欄を埋めながらパートナーに音読し、片方が終了したら交代した。両方が終了して時間の余裕があるペアには、別の形式の文章を音読するように指示した。例えば、特定の品詞を別の語に置き換える、または、動詞の原形を正しい形にしながら音読をする等の難易度が高いものに挑戦させた。その後、合いの手音読を行った。これは、生徒はペアになり、1人が英文を音読する方法である。1文ごとに片方が“Who?” “Where?” “When?”等の質問をしてくるので、それに答えていく。話し手は相手に質問されることで、相手に聞こえる声で音読し、聞き手は相手の言うことを聞こうとするようになった。また、“Pardon?” “What?” “Once more, please.”など日常会話で相手の言うことを聞き直すときに使う表現も自然に言えるようになった。

## エ 音読活動III

音読活動I、IIで身に付けたことを自己表現活動につなげるための音読を行い、音読できたテキストの内容をできるだけ自分の言葉で話せるようになることを目的とした。その方法として、バズリーディング(個人での音読)を行った。生徒に3分程度の時間を与え、何度も繰り返し英文を音読させた。個人での音読は相手がいなかったために、チャンキングやイントネーション、アクセント等の音声面の特徴を考えずに読む傾向があるため、そうならないように注意を促した。

<p>Lesson 5 Sadako's Story Part4 Study Sheet</p> <p>1st paragraph : Refugee children in Australia</p> <p>Another influence of Sadako's story on <u>an English school in A</u>  for ( ) from many d</p> <p>The students from Bosnia and Croatia didn't ( ) ( ) well</p> <p><b>Because</b> their home countries had been at ( ).</p> <p><b>At first</b>, they moved their desks ( ) from each other.</p> <p><b>But then</b> they read Coerr's book and talked about ( ).</p> <p><b>Then</b> they began to practice _____ together</p> <p><b>After a few weeks</b>, they felt more ( ) with each other</p> <p>A boy from Bosnia : We are all _____</p> <p>I couldn't hate my ( ) any more</p> <p>2nd paragraph</p>
---

図3 内容理解プリント

<p>1st stage: fill in the blanks.</p> <p>Although the ubiquitous ( ) society seems wo  Side. For ( ), hackers trying to break ( ) compu  And even ( ) can be stolen. Some people are ( )  ( ) addition, the information we get through  comput ( ) ( ) ( ). In the near future, ( ) ( )  Will ( ) our every day lives. Some of the above exa</p>
--

図4 音読プリント

<p>Topic: Extinct animals should be revived by cloning.</p> <p>I (agree, disagree)</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>Choose one of the opponents' opinions and write your  The (Negative, Affirmative) said</p> <p>_____</p>
---

図5 自己表現プリント

## オ 自己表現活動

音読した英文の内容や学習した語句や表現を利用して自己表現活動ができるようになることを目標とした。本文中の語句や表現を使って、「絶滅した生物をクローン技術の使用によって、現代に復活させることについてどう思うか」をテーマにして英作文を考えさせた(前頁図5)。最初の1文には“I think ~ because ~.”の形式を用いて書き始めるように伝え、続きの文は授業で学んだ語句や表現を使って文を作ることを指示した。そして、書いた英作文を何度か音読させて、できるだけそれを見ないで発表するようにさせた。

### (5) 授業の考察

#### ア 検証の視点Ⅰ(音読による重要語句や表現の定着)

検証授業では、内容理解やクローズリーディングのプリント等を使用し、自分の考えを相手に伝えようとする力の基礎となるように、教科書本文の重要な語句や表現の定着を図った。その結果、自己表現活動では、88%の生徒は音読によって学習した語句や表現を使って文章を書くことができた(図6)。これは、音読によって語句や表現が定着し、自己表現活動につながったと考えられる。

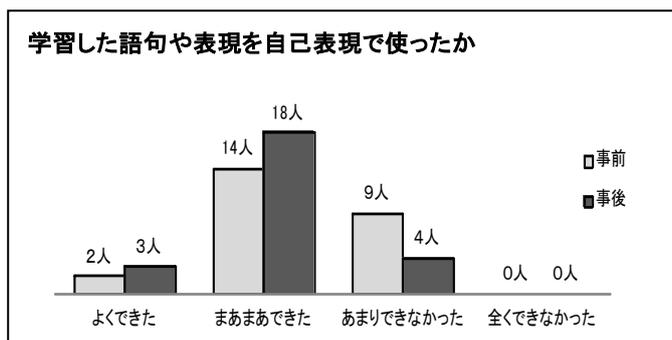


図6 学習した語句や表現の定着に関する意識調査

#### イ 検証の視点Ⅱ(聞き手を意識したコミュニケーションの定着)

自己表現活動の中だけではなく、音読指導や内容理解の中でも、聞き手を意識したコミュニケーションを取り入れ、その定着を図った。授業を重ねるごとに、生徒は聞き手を意識して話すことができるようになった。例えば、相手の反応によって話す速度を遅くしたり、ジェスチャーを使ったり、簡単な表現に言い換えたりするようになった。検証授業②の後に実施した意識調査の結果によると、聞き手を意識したコミュニケーションができるようになった生徒は、「よくできた」、「まあまあできた」を合わせると、8人から18人に増加し、「あまりできなかった」、「全くできなかった」は合計18人から8人へと減少した(図7)。このことから、様々な活動に聞き手を意識させるコミュニケーション活動を取り入れ、その機会を増やすことで、相手が自分の考えをより理解できるように、生徒は相手との関係を築きながらのコミュニケーションを心掛けるようになった。

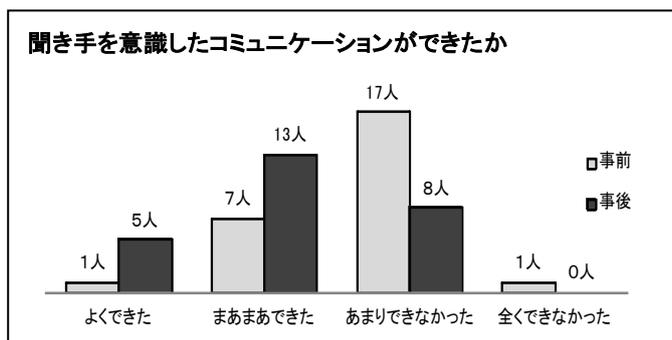


図7 聞き手を意識したコミュニケーションに関する意識調査

自己表現活動において、検証授業前に「携帯電話の校内使用について」、検証授業後には「絶滅した生物をクローン技術で現代に復活させることについて」というテーマで英作文を書かせた。そして、それぞれの英作文の総語数を比較することで、自己表現への意欲の高まりを検証した。これは、相手に自分の考えを伝えようとする気持ちがあると、間違いを恐れずにたくさん書こうとして、その結果、単語の量として現われるからである。これから、総語数の増加を自己表現への意欲の高まりの表れであると考えた。

#### ウ 検証の視点Ⅲ(伝えようとする意欲と伝える力の高まり)

自己表現活動において、検証授業前に「携帯電話の校内使用について」、検証授業後には「絶滅した生物をクローン技術で現代に復活させることについて」というテーマで英作文を書かせた。そして、それぞれの英作文の総語数を比較することで、自己表現への意欲の高まりを検証した。これは、相手に自分の考えを伝えようとする気持ちがあると、間違いを恐れずにたくさん書こうとして、その結果、単語の量として現われるからである。これから、総語数の増加を自己表現への意欲の高まりの表れであると考えた。

それぞれの英作文における総語数の変化は表3のようになった。テーマは検証授業前の方が生徒にとって身近なものであると思われるが、22名中82%(18名)の総語数が増加している。また、検証授業前の総語数の平均は34.4語、検証授業後の平均は50.7語で148%の増加率であった(表3)。

表3 検証授業前と後での自己表現活動における総語数の変化 (単位:語)

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	平均
事前	25	11	41	41	37	40	28	10	72	23	39	34	17	16	16	5	53	50	34	19	56	89	34.4
事後	80	46	51	50	81	46	75	37	79	17	40	40	44	47	39	46	46	33	41	28	79	71	50.7

また、右図は横軸に検証授業前の総語数、縦軸に検証授業前後の総語数の増加率を取り、それをグラフに表したものである(図8)。検証授業前の総語数が50語以上の生徒をA群、25語以上50語未満をB群、25語未満をC群と3つの区分にした。それぞれの平均増加率は、A群で96.7%、B群で167.7%、C群で340.7%であった。A群の平均増加率のみ減少した。理由として、検証授業前の総語数がもともと多く、これ以上の総語数を増やすことは困難であったことが考えられる。B群、C群はどちらも増加率の上昇が見られたが、中でもC群の増加率が著しく大きい。これは総語数がもともと少ないことが理由として挙げられるが、それを考慮に入れても、かなりよい結果が得られた。このことから、英作文等の自己表現において、特に、総語数が比較的少ない生徒の伝えようとする意欲を高めることに効果があったと考える。

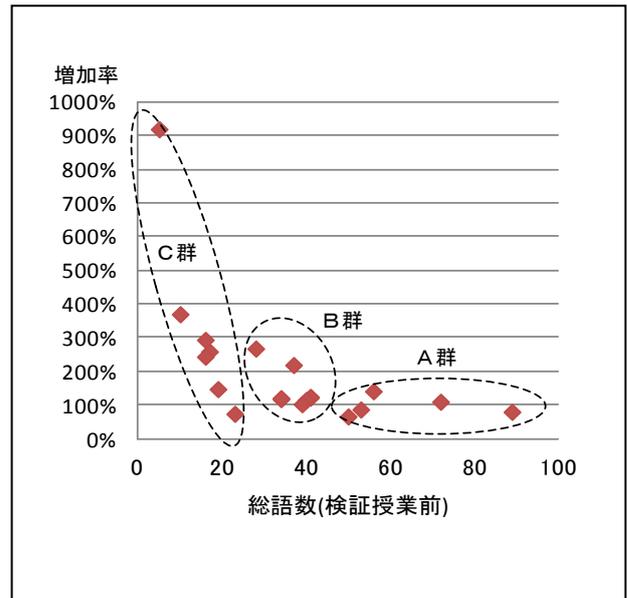


図8 総語数と増加率の関係

また、生徒の英作文を「論理の一貫性」という点から、伝える力の高まりを検証した。論理の一貫性があるかを見る指標は幾つかあり、その1つにdiscourse markers(論理展開指標)、いわゆる「つなぎ言葉」がある。これは、文章の論理展開の目印となる語句や表現のことである。例えば、therefore, however, first, in other wordsといった語句がある(図9)。論理的な英文とは、このdiscourse markersがうまく使われている文章である。相手に伝えたい内容がはっきりするように論理を展開し、自分の考えを理解してもらえるように分かりやすく伝えるために必要なものである。そこで、生徒の英作文のdiscourse markersの数を調べることで、論理の一貫性があるかどうかを検証した。その結果、検証授業前と後を比較して、生徒22名のdiscourse markersの合計数は21語から60語に増えていた。1人当たりの平均語数も1.05語から2.73語への増加となった(表4)。

- 「対比」: but / however / on the contrary / in contrast...
- 「具体化」: for example / for instance / say...
- 「言い換え」: in other words / that is to say...
- 「結果」: therefore / consequently / as a result...

図9 discourse markersの種類

表4 discourse markersの平均語数

	検証授業前	検証授業後
discourse markers の総数	21語 (22名)	60語 (22名)
1人当たりの平均	1.05語	2.73語

下図では前頁図8のA群の生徒の検証授業前と後の英作文を比較している。この生徒は総語数が89語から71語に減ったが、discourse markersは1語から5語に増えている(図10)。内容も論理的な文章になっており、量的には減少したが、質的にはよくなったといえる。以上のことから、相手を意識し、自分の考えを相手に伝えようとする意欲や伝える力が高まったのではないかと考える。

検証授業前	検証授業後
<p>Sometimes they cause trouble and don't need school life. If we have cell phones in school, we will not study hard.</p> <p>It is very useful to contact with my family, friends and so on.</p> <hr/> <p>I don't have my cell phone because we can live without it.</p>	<p>Today, a few scientists think they can bring extinct animals back to life. So, they are trying to revive, especially, mammoths. The mammoth is an animal which died about 1,000 years ago. Mammoths had lived in a wide area from Ireland to eastern North America. But we don't know why all the mammoths died. As the reason, some say they were killed by a big climate change or by some diseases. I think reviving mammoths is not necessary because it is not good for environment.</p>

図10 生徒の英作文における discourse markers の比較

## 7 研究のまとめと今後の課題

本研究では、情報や自分の考えなどを英語で伝える能力及び伝えようとする態度を育成するために、音読指導の工夫に焦点を置いて研究を進めた。それぞれの音読の目的を意識し、取り組ませることで、チャンク、語彙、表現などのインプットの量が増え、それが定着し、自己表現活動でのアウトプットで生かすことができたという点で効果が見られた。しかし、今回の研究では自分の考えを相手に伝えることを中心に指導してきたため、間違いに関してはあまり注意をしなかった。今後は自己表現に対する文法等のフィードバックを行い、英語の正確さも同時に求める指導の工夫とその手立てを考える必要がある。

### 《引用文献》

- 1) 文部科学省 『高等学校学習指導要領』 平成21年3月 p. 87
- 2) 田村 栄治 『AERA』 2011年1月24日号 朝日新聞出版 p. 28
- 3) 門田 修平 『英語教育』 2009年2月号 大修館書店 p. 11

### 《参考文献》

- ・ 伊藤 治己 『アウトプット重視の英語授業』 2010年 教育出版
- ・ 文部科学省 『英語教育改善実施状況調査結果概要(高等学校)』 平成18年3月
- ・ 文部科学省 『高等学校学習指導要領解説外国語編英語編』 平成21年12月
- ・ 門田 修平 『シャドーイングと音読の科学』 2007年2月 コスモピア
- ・ 鈴木 寿一 『英語教育』 2009年11月号 大修館書店
- ・ 次重 寛禧 『コミュニケーションを目指した英語の学習と指導』 2001年3月 鷹書房
- ・ Miyasako, N 『Is the Oral Reading Hypothesis valid?』 2008年 Language Education and Technology